

国歌・君が代の源流を探る

― 歴史を訪ねる旅 (15) ―



下土橋 渡

著者の自宅から車で20分足らず走った隣町の薩摩川内市入来町に大宮神社という神社があります。その神社の鳥居の近くに次の様に書かれた看板が立っています。

「君が代」発祥の地

ここ、大宮神社に昔から奉納されている神舞の中で「君が代」を歌います。

これが明治三年に歌い始められた国歌

「君が代」の基になったのです。

入来町郷土史研究会

一方、神奈川県横浜市中区に妙香寺という日蓮宗の寺院があります。この寺は国歌・「君が代」発祥の地として知られており、境内にその石碑が建てられています。

薩摩藩は、1869年(明治2年)に日本で初めての近代的な軍楽隊である薩摩藩軍楽隊(通称、薩摩バンド)を設立しました。薩摩バンドは妙香寺を寄宿舎とし、当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウィリアム・フェントンの指導を受けていました。その頃、日本にはまだ国歌がなかったためフェントンは国歌の必要性を説き、歌詞があれば作曲しようかと問いかけます。

それを受けた、当時薩摩藩歩兵隊長であった大山巖は、自分の愛唱歌だった薩摩琵琶の『蓬萊山』の歌詞の中より『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖いわおとなりて苔のむすま

で』の部分を選んで、フェントんに作曲を依



『国歌君が代発祥之地』の石碑
(横浜市・妙香寺) ①

頼します。フエン-tonはさっそく曲をつけ、1870年(明治3年)に薩摩バンドによって初演されたのです。すなわち、横浜の妙香寺の石碑は、国歌・『君が代』初演の地の石碑なのです。

さて、鹿児島県の片田舎の神社で昔から奉納されていた神舞の中で君が代が歌われていたことが、明治3年の国歌『君が代』の成立にどのようなつながって行ったのか、歴史の接点を探ってみたいと思います。

一、入来

鎌倉時代に関東の豪族として現在の東京・渋谷に城を持ち、また相模の国(現在の神奈川県)に勢力をもっていた渋谷氏の男子5兄弟が、宝治元年(1247年)に、鎌倉幕府から戦勝の褒美として北薩摩の地を与えられて下向しました。

入来(現在の薩摩川内市入来町)の地に入った渋谷氏は、入来院と名乗り、居城として山城・清色城を築き、その清色城を背景に山裾に近世の地頭館(お飯屋)を置きました。東を流れる樋脇川との間の平地を中心的な武家集住地として集落が形成されました。その旧武家集住地は平成15年(2003年)に国の重要伝統的建造物群保存地区(武家町)に選定されています。

入来院氏は、16世紀中期頃に島津の軍門に下りますが、近世は島津大名家御家門の一



庶流入来院家の茅葺門



旧武家集住地の屋敷割り

つに数えられ、明治維新までの620年余りに渡ってその社稷しゃしょくを全うしました。

二、大宮神社と入来神舞

鎌倉時代以来入来院の総社として、産業生産、縁結の神として郷民に厚く尊崇されて来ているのが大宮神社です。祭神は大己貴命(また、大物主命、大国主命とも)、近江国坂本に鎮座する日吉神社の支社として祀られて来た神社で、明治4年(1871年)以来は郷社とされました。

その大宮神社では毎年、例祭(11月23日)と大晦日に独自の神楽・入来神舞が奉納されています。古代入来隼人の隼人舞と、中世に相模国から下向してきた渋谷氏が伝えた上世雅楽、並びにその後流入した出雲神楽などが混和されて、現在の演劇的入来舞が生まれたといわれています。舞は種類によって異なりますが、1〜12名の男女で構成され、

楽は太鼓1名、笛1名です。演目は全部で36番まであり、それぞれ5種の神楽曲のいづれかを使って舞われます。演目を大別すると、古代以来の攘災呪術的舞(巫女舞・火の神舞・剣舞等)、稲作儀礼に関する舞(杵舞・田の神舞等)、岩戸神楽舞(天岩戸の神話劇)の3つに分けられます。

36番中の22番の『十二人剣舞』は、中央鬼神が、剣を持った白装束の12人の舞人に天照大神の由来を説く岩戸神楽舞で、この舞中で舞人が左手に太刀を持って登場し、鬼神の前に出て『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで』と声高らかに朗詠します。この舞で登場する12人剣士(現在は地元入来町に在住の小中高校生が舞っています)は、奈良時代の前後にかけて、隼人族が皇宮12門の警衛にあつたことから、衛門隼人を象徴しているとされています。



大宮神社 (2013年1月1日撮影)



十二人剣舞 (大宮神社、2012年12月31日撮影)



十二人剣舞（大宮神社、2012年12月31日撮影）

三、君が代の原歌

君が代の歌詞の原歌、いわばオリジナル・バージョンとして知られているのが、10世紀に編纂された『古今和歌集』（905年〜912年頃完成）に収録されている次の短歌（巻7・賀歌・343、読み人知らず）です。

わが君は千代に八千代にさざれ石
の巖いわたとなりて苔のむすまで

〔現代語訳〕

わが君は千年も八千年も長生きして
下さい。あの小さな石が大きな岩に成
長して、その岩に苔が生えるまで。

賀歌とは、祝いの気持ちを表した歌で、古今和歌集をはじめ、勅撰集部立ての一つとして、特に長寿を祈る歌が多いとされます。す

なわち、このオリジナル・バージョンは、わが君（私の主君）の長寿を祈る、いわばバーズデーソングだったわけです。

ところが、古今和歌集から約100年後の『和漢朗詠集』（1018年頃成立）の鎌倉時代初期以降の版本においては『わが君』が『君が代』となっているものが多いとされます。すなわち、時代の潮流で『わが君』という直接的な表現が『君が代』という間接的な表現に置き換わったのではないかと推測されています¹。そして、入来神舞の『十二人剣舞』にも『君が代は千代に八千代に・・・』の歌詞が取り入れられたのでした。これが、日本国歌『君が代』の成立につながっているのです。言い方を変えれば、『君が代は千代に八千代に・・・』を歌う入来神舞の『十二人剣舞』の存在がなかったら、国歌『君が代』の成立もなかったということになるわけです。

四、薩摩琵琶

鎌倉時代の初めに中島常楽院（現鹿児島県日置市吹上町）を建立した宝山検校をはじめとする中島常楽院の歴代の住職によつて弹奏された琵琶を源流として、室町時代になると薩摩盲僧から『薩摩琵琶』という武士の教養のための音楽がつくられ、しだいに語りもの的な形式を整えて発展していきました。

薩摩琵琶は16世紀に活躍した薩摩の盲僧・淵脇了公がときの領主・島津忠良の命を受けて、武士の士気向上のため、新たに教育的な歌詞の琵琶歌を作曲し、楽器を改良したのが始まりだといわれます。

伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・島津忠良（1492～1568年）は、日新齋にっしんさいの号で知られ、『島津家中興の祖』と称され、人間としての履み行うべき道を教え諭した『いろは歌』の創作で



薩摩琵琶発祥の地・中島常楽院
(鹿児島県日置市吹上町) (写真上)
と薩摩琵琶 (写真左) ②



も有名です。
その儒教的な心構えを基礎とした忠良の教育論は、孫の四兄弟・義久、義弘、歳久、家久に受け継がれ、その後の薩摩独特の士風と文化の基盤となったといわれ、『いろは歌』の精神は後の薩摩藩士の郷中教育の規範となり、現代にも大きな影響を与えているといわれています。

五、薩摩琵琶歌『蓬萊山』ほうらいさん

薩摩琵琶歌『蓬萊山』は、日新齋が作詞して、淵脇了公に曲を付けさせてできたもので、祝言・戦勝その他の慶賀すべき祝いの席で歌われる、いわゆる賀歌となりました。以後、薩摩の武家屋敷で慶賀の席には付きものの曲として歌われ、いつしか、それが伝統となり、明治に入っても、この琵琶歌を歌えない薩摩藩士はほとんどいなかったといわれます。

そして1869年(明治2年)に当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウイリアム・フェントンに国歌の必要性を説かれ、歌詞があれば作曲しようという問いかけられた、当時薩摩藩歩兵隊長であった大山巖は、自分の愛唱歌だった蓬萊山の歌詞の中より『君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで』の部分を選んで、フェントンの作曲を依頼したのでした。

蓬萊山 (作詞：日新齋／作曲：淵脇了公)

目出度やな君が恵みは久方の光り閑(のど)けき春の日に不老門を立ち出でて四方(よも)の景色を眺むるに峯の小松に雛鶴棲みて谷の小川に亀遊ぶ君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで命ながらへて雨塊(あめつちくれ)を破らず風枝を鳴らさじと云えばまた堯舜(ぎょうしゅん)の御代も斯(か)くあらむ斯程(かほど)治まる御代なれば千草万木花咲き実り五穀成熟して上には金殿楼閣豊を並べ下には民の竈(かまど)を厚うして仁義正しき御代の春蓬萊山とは是とかや君が代の千歳の松も常盤色変わらぬ御代の例には天長地久と国も豊かに治まりて弓は袋に劔は箱に蔵め置く諫鼓(かんこ)苔深うして鳥もなかなか驚くようぞなかりける

六、歴史のつながり

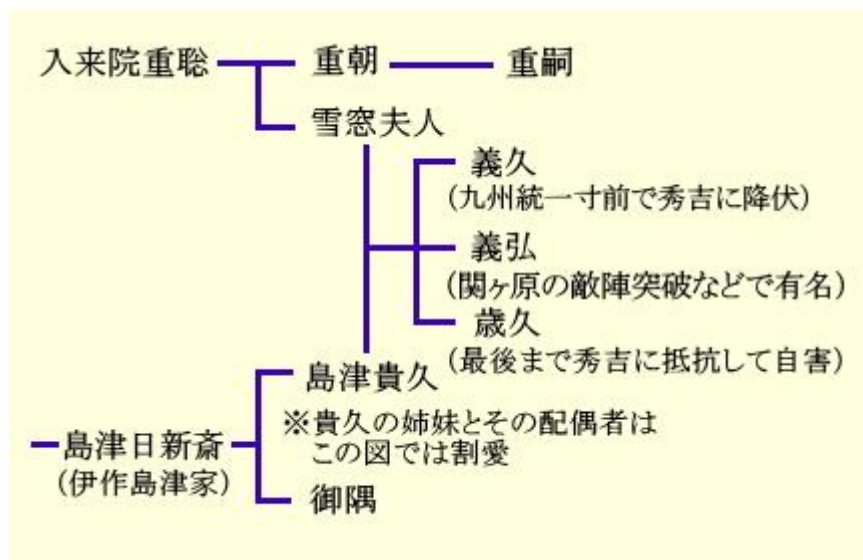
では、1870年(明治3年)に横浜で初演奏された国歌・君が代と入来院大宮神社の神舞の中で歌われる『君が代は千代に八千代に・・・』とは、どう結びつくのでしょうか？

島津家と入来院家の婚礼

島津宗家は、第12代当主、第13代当主が早世し、第14代当主・島津勝久は若年だったため弱体化していました。そこで、勝久は島津忠良(日新齋)を頼り、忠良の嫡男・島津貴久を養子に迎えました。

貴久は大永7年(1527年)に島津氏第15代当主となりましたが、正室だった肝付兼興の娘が亡くなると、入来院11代当主・入来院重聡の娘(雪窓夫人)とせつそうぶじんを継室に迎えました。

雪窓夫人の継室入りは、忠良の所望によるものだったと言われます。雪窓夫人は、島津



系図 (島津日新齋 — 入来院重聡)

四兄弟といわれる貴久の男子四人のうち、島津氏第16代当主となり九州統一の寸前で豊臣秀吉に降伏した島津義久、関ヶ原の敵陣突破などで有名な島津義弘、最後まで秀吉に抵抗し自害に追い込まれた歳久の3名を産みます(前ページの系図を参照)。

祝言の席で

入来院重総は、娘と貴久の祝言の席で入來の祝い舞である大宮神社の『十二人剣舞』を披露しました。そして、その舞に何度も出てくる『君が代は千代に八千代にさざれ石の・・・』という和歌を、日新齋がいたく気に入りに、自作の『蓬萊山』の歌詞の中に取り入れたというのです⁽³⁾。

七、初代・君が代

1869年(明治2年)に当時横浜に駐屯していた英国陸軍第十連隊第一楽隊長のジョン・ウィリアム・フェントンによって作曲さ

れた『初代・君が代』は、翌明治3年に横浜妙香寺において薩摩バンドによって演奏されたのですが、メロディーが洋風であり日本人に馴染みにくいものだったため普及せず、楽譜が改訂され、明治13年(1880年)に現在の君が代が誕生しました。

(元九州職業能力開発大学校教授)

【参考にした図書とサイト】

- (1) 君が代ーウイキペディア
- (2) 薩摩琵琶ーウイキペディア
- (3) 小田豊二著『初代「君が代」』(白水社、2018年4月)

